

東松島復興推進員だより(第1号)

～地を往きて走らず～

8月18日に新規着任した復興推進員(国際協力推進員)3名は、宮城県(宮城大学)から派遣された8名と合同で、NPO法人ソムニード中田豊一代表を講師に迎え、4日間の現地導入研修を行いました。



研修参加者による自己紹介



高崎経済大の学生が見学に来訪

実践研修では、市民協働まちづくりの中核機能である8市民センターのうち5センターを訪問し現況ヒアリングを行いました。各地区内住民でも被災者と被災していない人の間での心理的なギャップが生まれていることや、元の世帯数とほぼ同数の仮設住宅が地区内に設置され、これら仮設住民をコミュニティー員としてどう受け入れるのか苦悩している市民センターの存在なども明らかになりました。また、大規模の仮設住宅団地に集中する外部からの支援により、他の被災者との間に不公平感が生まれているのではないか、住民の依存心を増長しかえって自立を妨げるのではないか、という市役所担当者の話もありました。

また、東松島市では地区自治協議会／市民センターを中心とした「地区懇談会」が頻繁に開催されています。この地区懇談会にもさっそく同席し、地域住民の望む復興の姿、行政と地域住民との視点の共通点・相違点などについて確認することができました。



矢本東地区懇談会の様子



野蒜地区懇談会の様子

復興推進員は、出身・住所、経歴、年齢等が全く異なるメンバー構成で、中には仮設住宅に居住している被災者もいらっしゃいますが、机を並べて時間を共有することで、復興推進員同士での相互理解や、視点の共通化ができたのではないかと思います。今後のコミュニティとの関係づくりにもつながる、いろんな発見や気づきを得ることができました。

今後の復興推進員たちの活躍に期待したいと思います。

以上

JICAは、宮城県、東松島市、宮城大学、東松島まちづくり応援団(NPO)等と共同で「地域復興推進員」を通じた震災復興モデル事業を東松島市で開始しました。このモデル事業では、「早期震災復興につながる”市民協働のまちづくり”を支援することを目指しています。ここで得られた教訓や経験を将来の国際協力に繋ぎます。